



加
667
2

本朝俗談志二之卷



- ① 信濃駒ヶ嶽 信濃駒ヶ嶽
- ② 奥州津軽富士 奥州津軽富士
- ③ 肥後川童 肥後川童
- ④ 駿州三保岡崎 駿州三保岡崎
- ⑤ 下野大師窟 下野大師窟
生流観音
- ⑥ 常陸道鏡宮 常陸道鏡宮
野馬
所前山
嶋子観音
- ⑦ 奥州道後社 奥州道後社
- ⑧ 下伝八幡不知 下伝八幡不知
- ⑨ 日向景清塚 日向景清塚
- ⑩ 播磨佐吉鳥井 播磨佐吉鳥井
所田植 乳寺
- ⑪ 近江山王鳥井 近江山王鳥井
- ⑫ 大和三輪名井 大和三輪名井

- ⑬ 武列石神井魚
- ⑭ 和列吉野川鮎
- ⑮ 指列名益鱈魚
- ⑯ 越後八幡至七郎
- ⑰ 野州日光錫杖取
- ⑱ 奥州南部私大
- ⑲ 大坂天王寺盡神
- ⑳ 播州儀慶搗漆

子持 貝桶 栗堅子

- ㉑ 駿河沖付鮎
- ㉒ 土佐井沖蛭
- ㉓ 上州桐生川鮎
- ㉔ 信州安宝塔
- ㉕ 下総鬼堂
- ㉖ 駿河梅津新板借
- ㉗ 空屋有石橋

本朝俗談志卷之二

采山翁沾涼著

① 信州駒ヶ嶽

信濃國信濃郡駒ヶ嶽の高遠城下の西まわりの
 春より夏八重の時に雪あがりり富士山のおも
 げのちると水は月の影に消えてを夜あそび
 又月のところより雪消ぐその時ふのまは優より
 ぬの草音の神のがしらましくわたりて生馬よ
 りまのお大きかり形らしくそい大巖をわたりて
 ちかからゆふゆふと雪の溜り糸かたへ
 びん祇佛の赤緒の場糸あそびて神を志す人

某を流し一教子の心也焼てかまわら劇へ投入下
 又猿を多く集り下しの下知し川を以湯を
 浴せんと大なる力をふるものし石をさして劇
 に入ら劇を演るの理し猿は川を重をたるとか
 せ給し川を重の猿をあやとまきくこに成ものこ
 猫は流よりもきひりし流勢の清正類の下知り
 五中の川を重しとまき酔るふし川を九千の流を
 九千流と云ふ大なる流しと封られし衆僧をよのこ
 かく歎きりりて再云形ひやうくも免らぬる国を
 承く所の人子害をあきらむの折云流とて一りたり
 せんがうみれんあひたり折して猿人難わると云



伝列大御方



まのあ三杯

四 筒粥神事

勝州有飯郡三保の松系三保明神に毎年正月十五日筒粥の祀ありとあり大空を以て粥を煮た竹の筒より五穀其外芋芋大根木麩くのみを身骨かゆく粥をりし煮たしをいゆの一盃をちりたりすべしありたりとありも明神のありきしそのみちりしは満作しし今を不承とんらこし○羽衣の松ありしありて人のねむりかけし松しよ○野鳥あり土俗云高岡野鳥の歌しをいし鳥子の多てし熱敷九十九足踏滅しし是もいふは昔年時三保まきし神し三保も多し鳥も多し

五 大師窟

下野國出流山千年院 寺在岩 坂東次礼十七番の礼ありがまの石佛の千子観あり五丈中の大岩と切窟あり三像二丈余の石向の観ありし世俗びく腔水の女侍くけりし西を春流とて岩と物と走あり昔よりしは窟の海より十歳より岩としたのろの岩より一丈半の階より三階より岩とて三丈とて人石とて大なり岩ありは岩なり小堂あり衣服を脱き浴衣或は襦袢をいりしをわらわくし是を定まりて懸指を懸し一穴入りあり第一所よりいりるに腔心階よりあり一別あり

と申す女帝し取公女帝の姉は母の光明后を
○弓削道鏡中けり下野國葉原寺の住僧し今在壽寺
新整ふく大改を為す法皇号と遷けおひし
○同公因於穴沢村即弟とすり少く一丈とすの古を
後門の叫しら月影と彫りありしと云ふ

○月公壺子とすりあるを極帝と親皇と崇め
大開の親音と終り寺と別親言寺とすり天を
指の後并核抱の成高寺の付室し天子の御所の
おとといと云ふ

七 今昔神

奥州南部に三戸山に今昔神の社に祭神猿田彦
の命と云ふ又弓削道鏡と云ふ而して神孫今昔の男根と

今昔大明神と云ふ聖堂のよう今昔と云ふ
川而も流るに同社あり実方朝臣といふ人云云
と云ふ一説は沙汰し下るるありと云ふ
と今昔大明神と云ふ後之と云ふ早岑の社と
下るるありと云ふ折るにけりとも云ふありしと云ふ

八 八幡不知

續日本記見

下迄古昔傍郡ハと云ふ方十間と云ふの表ありか
地を修るはあへん人いふと云ふ

九 聖清塚

元文の隙日向國伊代に古聖清塚と云ふの御之
聖の由は古の塚と云ふ何人の古塚と云ふを云ふ

言うと土をくぐりてんたふきふせの揚せせりて
 をはくかひもて懸瀧居しとておの憂せき瀧の
 濁國子流さるゝとわきも其志癒けりとかの
 石を掘りてありて一箇とてりれり二三所
 旅の民家ありて昼飯かき一音と瀧く書きおま
 りあやせり件の石橋に渡りて到りてつりけり
 又堂院に渡りて一けり湖老人一人ありてあり
 事と向ふ人の中付りてある心をさる老人れ云
 我もぬりて懐ねをよむと見ゆけりきりし
 いゆりてとて見せりて老人をさる感一とてと
 くれりてあふ雨のさるひありけり法よ

日向宗法坊



とらあり是にさしわれば一舟も一舟あをゆると
等然を先別たし紙をわきけりし一首をきて後
しぬをさしゆりて主人くもをくるとんくまひ
と猶うの舟もよあけしに舟に舟あひせん
ありやとまらに結なれぬ村の板敷迎村も
まらの人あはれしそれりかの舟もよあけし舟の
ふ舟し是清の住居の所しそれり舟あをとり
舟法の虫あはれし舟もあはれし舟あをとり
かの舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり
たあそこの舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり
ちりたあそこの舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり

⑩ 住吉鳥井

振州 住吉田のそとのふのふの井あきり二枚四角かり
世よ新ひまきり 祭神底筒男命 中筒男命
表筒男命 神功皇后 四座入 社領二千百十六石
○ 伊田極の神事 五月廿八日 伊田の伊田を極く
早し女いの水列場 乳守の徳かみしを勤む世俗云
神功皇后 三韓を征し 伊田の伊田陣の時 長門國
より 極女をとり 五穀農業のよりとせに度り
あはれし舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり
は例ありし舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり
を徳ひあひし舟もあはれし舟もあはれし舟あをとり

形子奉祀と為社子新 諸るる年あり 神流して
流人子西をわたり 祈きとて 固ては早に世にあり
目をうり子悪瘡多く 愈て顔色うりまきこ
今傾城所の腰巖に 糸の乳を流る事 乳のみに
かへば故 蘇よありあり

⑫ 山王鳥井

江州山王の鳥井は 笠原のくまよ又三角の笠原ありを
を惣合の鳥井と云 合神二十社 松尾神内新し
祭礼四月二月中の申し七社の神輿を 幸宮の漢よ
了舟はり 湖よりうり び大祭くむい けりし
血を及ねし 神輿とてと云 衆徒の権はよく 際

ひやせ中らひあへて 今に流世をへんそのまかり

⑬ 三輪鳥井

和州三輪の鳥井は 二柱の左右より一段傾きき鳥井は
二つともは 鹿ありて 同とてと云 三光の鳥井といふ
祭神大物主神と 河彦彦神代大和神と云 社所
尚社の跡ありたり 社かへ 本社いふや云 板のあり
願うら小き丸と云

⑭ 石神井魚

大州を馬郡に 神井の湯は 湯の池の魚は 皆
鱈なり 湯の井のかしらあり 湯水は けい魚田海
へ流る 湯をく 雨の人と云 けい魚と云 湯

ス津井の住者なりとてうん

④ 沖津鰯

磯洲有波郡二條のきのの鰯は鱈より五分
のちうらほようをりうわしくあり沖津鰯とて魚

⑤ 吉野川鰯

和列吉野川の鰯は鰯とてわらのうき
うきう花のちうあり 雲んし
小わりのちうりうの川

⑥ 井沖鰯

土佐國安芸の連井沖村の鰯は人を言ふ法は
魚のせはうしにいひとくふふて虫のこせ封
らうしとくし小津びんを魚は津村のあり

⑦ 縞鰯

塚洲有馬郡名塩村の谷川にありがら鰯は似て白
筋系縞のあり 鰯をうきうせし今根要の
ありうきを殺て盆水に放つてえうのち

⑧ 桐生川鰯

と加山田郡桐生川の鰯は先曲とてうら
人異曲とて月おと鰯の列をくあま

⑨ ハツ場全七ッ鰯

越後高田の近所新井宿の近きに東西よらう
一冊とくありハツ場と西の鰯はあまうの
からく七ッ対ハ鰯のうらうらうの鰯は

① 信州無宝塔

信濃より井野温湯村横井温泉寺はもと
 皇仁のころあり信之阿闍梨の御
 造化一棟年首の山にせしむるを
 流通せりしと云ふ事の中
 九代以来より代々の信濃の志士
 せ宝塔といふ事しむるあり
 或は流しやとすり時大数
 ありはるへ事云ふはるはる
 何故秘近世より俗流云はる
 ありはるへ高深何某居敷の
 ありはるへ

和州三輪



日光湯杖取



鬼堂

下総國香取郡交野村香西寺に鬼堂と云く
毎年七月十六日世継遊のわりの高岡麻王五
道冥官三途川の築青衣の三鬼と梅の衆人を
所敷の所二十五并祈り供養の衆人を救ふ也
そのありは衆人のけりものをも病長病の人或は
疫病熱病の人をもて成るもの病人も一夏其病
せよといふものなり同く年々ありて祈り少くも
世俗云びう一祈り若くもあひして口をきりて
けり衆人と名するを制む力なく本陰の衆
病をさうせりし里人ありて又六町におもひの屋

は堂ありて世々を明されし食物をくをわたり
やうなる甚きを末びに一間をりわりの堂に
長流年毎にうり来る一説を病しけり新卒
と云ふまきの二男わりの色女斎くともあつもの
い女しけり二男病をい所敷す屋その家の
く耳をけりぬく出家かゝる病をも救化せん
堂より座をわたりしれり世三鬼の衆人の母を
いとうりて病をわたりていふもの事と向我の
土に推し各病をいあ若の衆人六日わりの事
かり仙中作るかたあへり毎に衆人をいふ事
衆よりいふ事とて世々の世々の世々の事

服衣たる事^しより^したの^し儀^し守^しの^し事^しあり^しと^し云^し行^し
 袖^しを^し切^して^しま^しし^しぬ^しお^し音^しの^し里^しに^し推^しふ^しか^しを^しあ^しぬ^し
 幸^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し如^し今^し日^しの^し志^しもの^し初^し七^し日^しの^し斎^し
 を^し進^しめ^しんと^し儀^しぞ^し十^し対^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 ま^しと^しお^しら^しり^しき^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 と^し儀^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 一^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 人^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 佛^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 一^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し
 さ^しの^しあ^しへ^しあ^しん^し張^し信^しの^し日^しの^し儀^しの^し好^し斎^しと^しも^し



今この沙汰旅うり



志うのから條

⑬ 南部私大

奥州南部 依合の控月小の奉公の月朔日と云
と一世上の二日を元朔に計るし八月廿七日
七日の縁といふ事 十日十日おぼしむるなり
年と縁一十二日より世上の通りし又いふに
六冊二冊し其遠月を今公長氏二里と云

⑭ 榊原頼朝

駿遠の界大井川の川上島田宿より一里と云の
榊原頼朝の村ありは西の山に榊原と云ふ一
の榊原と云ふ小祠ありは社に祀るに
あり入朝の景日中なる清月日孫頼朝何人

かゝりありしと云ふに
まのそありしと云ふの
と云ふもそのありし
人のあましく対し
中よりさうくし
きて今ありし
以形ふ時ありし
七人もの大
東也といふ
文といふ
わたりし

高き方の他の花よりまきく人とは家さくらよあつく
しきものるおまひ一儂は仕事と結びしとそれ
限りをためてきた事し世俗あをを降日守とと
又年之のゆもさうりあり形はあへ今大なるえ
お徳の言事しとまそれうは家さくらに家
三十年子元ざりよ今子石余のちおなりぬ海
の大工小をわとまものへ流はあへ作りのり
内は春まを海さうまきくさうと云

廿五 歯の神

大坂天王寺の東門の内子歯の神と云小初わりとら
くの歯のりりひをわつるよと云西のまろりわん
大坂天王寺の東門の内子歯の神と云小初わりとら
くの歯のりりひをわつるよと云西のまろりわん

産ひひり ちぢぢぢ 大坂の足をとくひわり 歯を
痛も歯さうり血流し歯を合すりりかく一
合をわり 歯根りり 西の人云歯の神くま
大豆のの葉してお斎一は夏まくお
歯のねを治せりりわねと社あり
叶りり歯の神りり歯の神りり歯の神りり
一してりり歯の神りり歯の神りり歯の神りり
平生の歯りり合はせりり歯の神りり歯の神りり

廿六 眼石緒

のち痛も後園小倉のち眼石緒小倉は
對して小倉痛りり小倉のち眼石緒小倉は

栲別のやうの感ぢりししゆをうらふ余のまぢあり
少生の仁浦をまゝむ工高の民小舎へ付外をけり
ひ外小舎のやうとけり九田名をまゝしてまじ

①七 信濃搗練

播州信濃郡印南野の軍より深野へ藍練あり
その色二色一色を志し海のから深よりの色とす
練よりうらけ外よりまじつるを別口又赤練深し書
赤れぬより一色にたててたがし

そめて思はまふゆめかきとてまらもねをまき我まの

○嫁娘にけし深を刺し太の行りもくも又其を海
水俵にまきけく水の色かれし人同の水を埒のたし

水花びとつるけりたの表示し

○嫁娘の衣服紫に大小の節二をみねたりの故とすり
毛陰陽くしとのみさり天之下の細き世し陰陽水
合しつるまも生れよめて毛を子指布とそつとそを
人同わらひの合敷も男が大きき女も生れよめし
そ天の太のけりし世の小けりのたし

○貝桶とる城の夜との遊物とすり八月の至室に
してまぢりの空のやう皆貝をみゆりし蚌蛤の執
みし秋異し長き通蚌圍に通蛤蚌從中蛤
從合しつる黄けりし日月の係備りし合弁に
陰陽けりし表けりし陰の貝の凹りし陽の貝の凸り

後陽成合の程し又書一〇〇のくつたも人の
のひくくしきくかきくく負女あましまるゝぬの程も
あり又婿れの合のぬの給をひははともは潤く
○旅塵のゆり烈い東海立まて人飛を東海にのせを
まらうあり俗に悪たをくひひと云り東海立まらへ
他侍司の板屋ありものくし行幸の時姫とて
おしきるいのりて供まする年しそ二懸三子
を又ひくくくし三子い天子のちんちんわらう
由法ありぬくや年毎に申文を利てかかひ候位
のくくしを賜^{たが}今しじうくくくを名を名は候位
新^{しん}贈^くと名はありし古事根元

